『比較論理学研究』第４号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

難問の方法と問答法

赤井清晃

1．はじめに

アリストテレスにおける問答法（ディアレクティケー）に関するいくつかの評価の中で，Wehrleによると (Wehrle, p.71)，ディアレクティケーの「論駁（エレンコス）」というはたらきは，究極的には，「吟味的ディアレクティケー (peirastic dialectic)」に基づいているという．しかし，その解釈が，ほぼ，Boltonのそれによっていることと，特に，『形而上学』Γ巻2, 4章の矛盾律や排中律の扱いについては，このことがあてはまると思われること，さらに，この問題については，今一度，用いられているエンドクサ（ἔνδοξα，通念）とタ・コイナ（τὰ κοινά 共通の原理）を，アポリアーの状況と吟味が行なわれる場面での認識論的ステイタスに関して，検討することが必要であると思われることをすでに指摘した．

エンドクサ（通念）に関しては，パイノメナ (φαινόμενα) を自然学的現象（現われ）だけに限定せず，多くの人々（あるいは，当該の分野の専門家）にそうであると思われている（現われている）事柄を含めて，ディアレクティケーが扱うエンドクサと解することによって，ディアレクティケーがかかわり得る対象領域が，特定の学問領域に限定されないという理解が可能になる．

他方，タ・コイナ（共通の原理）に関しては，『分析論後書』において，通常の論証では，論証の対象ととならず，思考の原理（あるいは法則）として，常に，論証の背後ではたらいている矛盾律や排中律をも，これに含めて解釈することによって，『形而上学』Γ巻の記述が考察の対象になる．

2．『形而上学』Γ巻の問題提起

アリストテレスの『形而上学』Γ巻の翻訳と註解を著したCassinとNarcy(p.24, n.23)によれば，オルテガは，諸原理の原理 (le principe des principes) が，すでにアリストテレスにおいて，principium essendi として機能するのに先立って，principium cognoscendi として証示されているということを示すために，déduction transcendantale について語っているという．諸原理の原理といわれるのは，いわゆる矛盾律のことであり，アリストテレスによって，次のように言われている．

> τὸ γὰρ αὐτὸ ἅμα ὑπάρχειν τε καὶ μὴ ὑπάρχειν ἀδύνατον τῷ αὐτῷ καὶ κατὰ τὸ αὐτό (καὶ ὅσα ἄλλα προσδιορισαίμεθ' ἄν, ἔστω προσδιωρισμένα πρὸς τὰς λογικὰς δυσχερείας)·
> 同じものが，同時に，そしてまた同じ状況に即して，同じものに属しかつ属さないということは不可能である（また，言葉の上での論難に対しては，他の条件で，我々が付け加えることができる限りのものを，付け加えて規定することとしよう）
> (*Metaph.* Γ 5, 1005b19-22)

しかし，実際に，オルテガのテクストを繙いてみると，オルテガ自身は，Γ巻におけるアリストテレスの論述そのものを評して，déduction transcendantale とは言っていないと思われる（*La Idea de Principio en Leibniz y la Evolución de la Teoría Deductiva* の中で，アリストテレスが直接の考察対象になっているのは，§ 16. Aristóteles y la <deducción transcendental> de los principos, pp.138-143. である）．むしろ，アリストテレス

と直接関係させて，Γ巻の，いわゆる矛盾律に関する議論を扱う論巧において，trascendentale という形容詞を用いているのは，Berti である．彼は，矛盾律が現実の或る事物だけでなく，実在全体を表現しているということを示すために用いたり (Berti, 1975, p.83, sic, selon Cassin et Narcy)，矛盾律を否定する論敵を論駁する議論が「否定不可能であることinnegabilitá」であることを示すために用いたり (op.cit., p.78) している．そして，ここまでは，アリストテレスのテクストをΓ巻に限っての話であるが，Berti は，さらに，可能的な経験の全体にかかわるだけでなく (op.cit., p.87)，超越的存在（超越者，特に，Λ巻の神あるいは，Γ巻末尾のそれ自身は不動の第一動者）の必要性・必然性とも結び付くことを示すために，trascendentale という語を用いていると思われる (op.cit., p.84)．Berti には，アリストテレスが『形而上学』で用いている哲学の方法として，アポリア（難問）の方法 (Ross, Lugarini, Ortega, ただし，Lugarini は diaporetica と命名する) よりも，限定された意味での哲学的問答法（あるいは，問答法，ディアレクティケーと表記する）がある，と解釈する立場から，特に，矛盾律を否定する論敵を論駁する議論をディアレクティケーによるものとし，同時に，矛盾律だけでなく，いわゆる第一哲学の考察対象にまで及ぶ方法としてのディアレクティケーの性格を trascendentale という語を用いて表したのだと察することができる．

この議論の背後には，エンドクサに関する解釈と同時に，一見すると，アリストテレスとは関係ないように思われる trascendentale（先験的あるいは超越論的）という語によって示される思考と思考の対象領域，さらにそれら全体の枠組みについての前提がある．

Berti は，別の著作において，アリストテレスの『形而上学』に関して，哲学一般に関することとして，ヘーゲルが『エンチュクロペディー』の冒頭で以下のように述べている，と言っている (Berti, *Le ragioni di Aristotele*, 1989, pp.84-85. 引用は B.Croce のイタリア語訳による)．

> la filosofia non ha il vantaggio, del quale godono le altre scienze, di poter presupporre i suoi oggetti come immediatamente dati dalla rappresentazione, e come già ammesso, nel punto di partenza e nel procedere successivo, il metodo del suo conoscere. (Trad. di B.Croce, Laterza, Bari, 1951, SS.1)

この後に，すぐに続けて，

> lo spirito pensante, solo attraverso le rappresentazioni e lavorando sopra queste, progredisce alla conoscenza pensante ed al concetto. Ma, nella considerazione pensante, si fa subito manifesta l'esigenza di mostrare la necessità del suo contenuto, e provare l'essere e i caratteri dei suoi oggetti. Quella certa conoscenza, che prima se ne aveva, appare perciò insufficiente; ed inammissibile il fare o il lasciar correre presupposti ed asserzioni. (op.cit)

Berti によれば，ヘーゲルにとっても，哲学 (filosofia) は，表象 (表象すること Vorstellen が，Croce の訳では，名詞の表象 rappresentazioni となっている）を通じてのみ，その手続きを進めて，概念 (概念把握すること Begreifen が，Croce のイタリア語訳では，やはり，名詞の概念 concetto となっている)，すなわち，学知（Wissenschaft, scienza）へ至ることができ，この表象こそが，エンドクサであり，そして，表象，この場合，すなわち，エンドクサを通じて，概念，すなわち，学知へと至る方法を，ヘーゲルは，アリストテレスの場合とは，異なる意味において，ディアレクティークと呼んでいるという（Berti, op.cit., p.85)．

一方，Berti が引用している Croce 自身は，その著『純粋概念の学としての論理学』の中で，次のように注記している (Croce, *Logica come scienza del concetto puro*, p.349, n.1.)．

> Kuno Fischer, nella sua *Logica*, esponendo il pensiero dello Hegel, distingue limpidamente i concetti empirici dai concetti puri, e nota che quelli puri o filosofici sono fondamento e presupposto degli altri. In effetto (egli dice) i concetti empirici <si formano dalle rappresentazioni singole o intuizioni col riunire i caratteri omogenei e separarli dagli eterpgenei.....>

> クーノ・フィッシャーは，その『論理学』において，ヘーゲルの思想を説明して，純粋な概念から経験的な概念を明確に区別している．そして，この純粋で哲学的な概念は，他の概念にとっての基礎であり，他の概念にによって前提とされる，と注記している．実際（彼が言うには)，

経験的概念は，「個別的表象あるいは直観から，同質的な性格を結び付け，それらを異質的な性格から分離することによって，形成される...」

他方，純粋な概念については，次のように述べている (op.cit.).

La differenza tra questi concetti puri o categorie, e quelli empirici, non è di quantità, ma di qualità: i concetti puri non sono i piú generali, le classi generalissime; non rappresentano fenomeni, ma connessioni e relazioni.

純粋概念あるいはカテゴリーと経験的な概念との差異は，量的ではなく，質的なものである．というのは，純粋概念は，きわめて一般的なもの，すなわち，最も普遍的なクラスというものでもなく，現象として表象されるのではなくて，結びつき，すなわち，関係として表象されるからである．

ここで，今，『大論理学』の概念論が念頭に置かれていると思われるクーノ・フィッシャーのヘーゲル解釈に立ち入る暇はないが，Croceの訳を援用するBertiの解釈に関して問題であるのは，彼がエンドクサであると見做す表象が，アリストテレスにおいては，経験的なものか純粋なものかは問題とされていない点であり，しかし，このことが同時に，Bertiをして，アリストテレスに，trascendentaleという観点を見い出させているとも考えられる．経験にうったえることによってではなくて，それ自体によって論駁・論証がなされざるを得ない，『形而上学』Γ巻における矛盾律の扱いが注目される所以である．

3．ディアレクティケーの評価をめぐる解釈瞥見

アリストテレスの哲学の方法としてのディアレクティケーをCorpusの中に見い出そうとする際に生じるテクスト上の困難は，ディアレクティケーそのものが主題である『トピカ』を別にすると，アリストテレス自身が，自らの哲学的考察の方法を（名詞形で）ディアレクティケーとは呼んでいないばかりか，「(もっぱら) ディアレクティケーにたずさわる者（ディアレクティコイおよびソフィスト）は，哲学者と同じ装いの下に潜り込む（同じ形を身につける)」と言われ，さらに，哲学の力（機能，能力）が，「知ること」「認識すること」にある（グノーリスティケー）のに対して，ディアレクティケーの力（機能，能力）は「試す」「吟味すること」にある（ペイラスティケー）という点で異なっている，と言われ(*Metaph.* Γ,c.2, 1004b17 sqq.)ていることにひとつの原因がある．しかし，「吟味（ペイラ)」という機能は，たしかに，ディアレクティケーの特徴ではあるけれども，「認識すること」という機能と排他的な関係にあるのではなくて，哲学の方法も，「吟味すること」を経て，「認識すること」にいたると解することによって，（もっぱら）ディアレクティケーにたずさわる者（ディアレクティコイ）の用いるディアレクティケーと，哲学者によって用いられるディアレクティケーを区別する解釈が行なわれている．なお，「吟味すること」に加えて，Γ巻では，「論駁（エレンコス)」もディアレクティケーの役割として見落とせないことは，後の矛盾律に関する議論で言及される．さらに詳しく言えば，用語上の問題として，アリストテレス自身が自ら積極的な意味でのディアレクティケーを用いるときには，そもそも「ディアレクティケー」という語を用いず（文脈は異なるが，アリストテレスが意図的に，「ディアレクティケー」という名称を避けているという指摘は，Mesch, p.99にもある)，却って，消極的な意味でのディアレクティケーのみを用いるディアレクティコイを批判する際には，「ディアレクティコイ」（或いはディアレクティコイの術としての「ディアレクティケー」）という名称を用いているということであり，それは，アリストテレスのディアレクティケーに関連する用語の用法上の区別であって，「ディアレクティケー」とその関連語が用いられるとき，積極的に肯定すべきものとして，ディアレクティケーが論じられる文脈（『トピカ』の記述の多くがこれにあたる）と，否定的に批判すべき対象として，ディアレクティコイ（ディアレクティケーを用いる人々）が言及される文脈（例えば，『形而上学』Γ巻第２章など）とがあり，ここに少なくとも二種類のディアレクティケーが区別されるという解釈である．この点は，一見すると類似する解釈であると思われるが，実は，ディアレクティケーについて論じている従来

の研究の多くが明確に意識しているとは思われない．例えば，学問としての第一哲学のためにアリストテレスが展開した"strong dialectic"と，『トピカ』等で述べられている"pure dialectic"を区別する (Irwin, p.19, passim) という解釈があるが，この解釈は，必ずしもテクスト上の根拠が明確でない，として多くの人から批判されている（例えば，Cleary,p.199,n.2，或いは，Smith(1997), p.xviii) が，ここで，少なくとも二種類のディアレクティケーが区別されると私がいうとき，それは，Irwin のいう区別とは異なる．また，Smith(1996) は，アリストテレス以前に現に行われていた"dialectical arguments"と，アリストテレスが『トピカ』で提示している"an art of dialectic"との区別を強調し，Brunschwig(p.189) は，P.Aubenque にコメントする中で，学的論駁をこととする"supra-dialectique"と，学的論駁に至らない"infra-dialectique"の区別に言及しているが，筆者がいう二種類のディアレクティケーの区別は，これらとも異なる．他方，また，アリストテレスの哲学に関して，Jaeger 的ないわゆる発展史的解釈の立場をとらない Berti は，Irwin に対する反論として，次のように述べているが，この解釈は，筆者に近いかもしれない (Berti, 1996, pp.105 sqq.)．Irwin が主張するように，pure dialectic と strong dialectic という二種類のディアレクティケーがあるのではなくて，同じディアレクティケーに public use と scientific use という二つの側面があるだけである，という．従って，アリストテレスは，ディアレクティケーを学問（論証）と対置させたり，真理の発見のために学問に役立つと述べたりしているので，一見すると，矛盾しているように思われるのであるが，そうではなくて，学問と対置させられているのは，ディアレクティケーの public use の側面であって，それに対して，学問に役立つとされるのは，同じディアレクティケーの scientific use の側面であるから，矛盾はない，というのである．つまり，ディアレクティケーの public use と scientific use の区別は，扱われる内容の区別であって，ディアレクティケーの手続きそのものは同じである，というのである．public use によって扱われるのは，たまたま public な場に集まった人々の意見・思惑 (doxai) にすぎず，これは真理と対置させられるものである．これに対して，scientific use によって扱われるのは，通念 (endoxa)，すなわち，すでにほとんど真理として信頼するに足る知者 (sophoi，すなわち，知識をもっている専門家) の見解であり，これは真理に非常に近い，あるいは，多くの場合，真であって，真理と対立しない，と言ってもよい，という．アリストテレスの Corpus に見い出されるのは，このディアレクティケーの scientific use の側面である，という．この解釈は，表象とエンドクサとの関係について，ヘーゲルへの言及がなされた後で，公表されたものである．

4．『形而上学』Γ巻における矛盾律の扱い

さて，次に，Γ巻における，矛盾律を扱う，アリストテレスの議論を見ていかなければならないが，まず，何故，矛盾律の擁護が本当の論駁であるのか，つまり，問答法的議論であるのかを見ておきたい．矛盾律は，アリストテレスによってすべての論証の，そしてすべての論述の（前提）条件であり，「最も確実で最もよく知られる原理（βεβαιοτάτη, γνωριμωτάτη ἀρχή）」(*Metaph.* Γ,c.3, 1005b 11-13) と考えられているにしても，しかし，アリストテレスによって前提されたものとして置かれているのではなく，疑問視され，問題とされている．アリストテレスは，実際，すべての論証の原理，つまり，矛盾律や排中律に関する真の考察（σκέψις）—この考察は，公理が真であるか偽であるかを決定することを目的としている—について言及している (*Metaph.* Γ, c.3,1005a 22,30,b 7-8)．

このような考察は，いわゆる本来的な論証の形式では構成されえない．それは正に，矛盾律がすべての論証の（前提）条件であるから，これを論証するために，そこから出発するべき前提は前以てあり得ないのである．このことは，アリストテレス自身によって，次のように述べられている．

ἀξιοῦσι δὴ καὶ τοῦτο ἀποδεικνύναι τινὲς δι' ἀπαιδευσίαν· ἔστι γὰρ ἀπαιδευσία τὸ μὴ γιγνώσκειν τίνων δεῖ ζητεῖν ἀπόδειξιν καὶ τίνων οὐ δεῖ· ὅλως μὲν γὰρ ἁπάντων ἀδύνατον

ἀπόδειξιν εἶναι (εἰς ἄπειρον γὰρ ἂν βαδίζοι, ὥστε μηδ' οὕτως εἶναι ἀπόδειξιν), εἰ δὲ τινων μὴ δεῖ ζητεῖν ἀπόδειξιν, τίνα ἀξιοῦσιν εἶναι μᾶλλον τοιαύτην ἀρχὴν οὐκ ἂν ἔχοιεν εἰπεῖν.

ところで，ある人々は，この原理［矛盾律］にまで論証を要求するが，これは彼らが教養を欠いているためである．というのは，何について論証を求めるべきであり，何については求めるべきではないという区別を心得ていないということは教養がないことの証左だからである．何故なら，何事についても一様に論証があり得るというわけではないからである――論証の論証を求めて，しかも結局，何ら論証を得られないことになるであろうから――．しかし，もし或る何かについては論証を求めるべきではないとするならば，あの人々は，その求めているような一層明確な原理として，まさしくこの原理以外にどのような原理を挙げることが出来るであろうか．

(*Metaph.* Γ, c.4,1006a 5-11)

矛盾律の論証不可能性は，矛盾律についての考察が何らかの個別学の一部をなすということを絶対的な仕方で排除するということによって示されている．そこで，もし矛盾律が論証不可能であるとすれば，＜不可能によって＞（つまり，歸謬法によって）もまた論証不可能であり，従って，矛盾律の擁護は，不可能による論証であるとは決して考えられないと言わなければならないだろう．「論証」または「論証する」ということの意味が，通常の意味でのそれと，通常の意味ではない，「論駁的な仕方での」それとを区別した上で，両者とも論証であることを可能にする「論証」としての必然性が問われる．

矛盾律の擁護は，従って，通常とは異なる種類の議論によって成り立っている．これを「論駁的に論証する（ἀποδεῖξαι ἐλεγκτικῶς）」とアリストテレスは呼んでおり，精確には、「もし，相手が何か一言でも言うならば，矛盾律を否定することは不可能である」ことを証示することによって成り立っている．(*Metaph.* Γ,c.4,1006a 11-12) 以下のように言われる．

τὸ δ' ἐλεγκτικῶς ἀποδεῖξαι λέγω διαφέρειν καὶ τὸ ἀποδεῖξαι, ὅτι ἀποδεικνύων μὲν ἂν δόξειεν αἰτεῖσθαι τὸ ἐν ἀρχῇ, ἄλλου δὲ τοῦ τοιούτου αἰτίου ὄντος ἔλεγχος ἂν εἴη καὶ οὐκ ἀπόδειξις.

ここに、私が＜論駁的に論証する＞と言っているのは，［普通に］＜論証する＞ということとは区別されなければならない．というのは，論証の原理を自ら論証しようとする者は，論証されるべき原理を前以て要請していると思われるであろうが，他の人が我々にその論証を求めたときに我々がするべきことは論駁（ἔλεγχος）であって，［普通の］論証ではないだろうから．

(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 15-18)

そこで，或る種の論駁，つまり，本質的に問答法的な議論――論証を立てるためにそれに基づくべき前提が欠如しているからであるにせよ，＜相手＞への必然的な言及による原理そのものの否定にせよ――が論じられていることは明らかである．しかし，議論の問答法的性格は，明らかに，問答という状況といったものからも生じてきている．実際，論駁の成り立つ条件には，＜相手が何かを言うこと＞であることが含まれる．言い換えれば，それは，相手によってなされた同意，相手が思いなしている前提である．この点をアリストテレスは，次のように言っている．

ἀρχὴ δὲ πρὸς ἅπαντα τὰ τοιαῦτα οὐ τὸ ἀξιοῦν ἢ εἶναί τι λέγειν ἢ μὴ εἶναι (τοῦτο μὲν γὰρ τάχ' ἄν τις ὑπολάβοι τὸ ἐξ ἀρχῆς αἰτεῖν), ἀλλὰ σημαίνειν γέ τι καὶ αὐτῷ καὶ ἄλλῳ·

しかし，すべてこの種の議論にとってその出発点とするべきは，その人に対して，何かがあるとか或いはないとか言うことを要求することにあるのではなくて――そのように要求することは，そのこと自体が既に原理を要請していると思われるから――そうではなくて，その人が何かを，自分にとっても他の人にとっても理解可能な意味のある何かを言うであろうという点にある．(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 18-21)

ἂν δέ τις τοῦτο διδῷ, ἔσται ἀπόδειξις·

そこで，その人がもし何かを言ってくれるならば，既に論証があることになるだろう．(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 24)

そこに，典型的な問答法的状況が出現するのである．つまり，矛盾律を擁護しようとする人は，相手の主張の理由を要求する者の立場にあり，即ち，批判・吟味し，論駁する者の立場にある．これに対して，相手，つまり，矛盾律を否定する者は，答え，応答する者の立場にあり，即ち，そこから議論が出発する前提を容認する者の立場にある．この過程は，初めの部分に，応答する者がひとつの容認をするかどうかということがあり，その問題の容認は何か或ることを言うこと，つまり，何か意味のあることを言

うことである．そして，このような容認がなされると，論証が生じるというわけである．

さて，しかし，このような議論は真の知識（学知・論証知）へ至る場を提供しているだろうか？この問題は，先に言及したように，ディアレクティケーは，「吟味すること」を経て，「認識すること」にいたる哲学の方法たりえるか，という問題である．これに肯定の答をすることは，アリストテレスがこの議論を＜論証＞と呼んでいることが正しいと言うことと同じことである．では何がそう言うことを許しているのだろうか？ 相手によって容認された前提は，単に相手によって思いなされているというだけでなく，＜必要且つ必然的な＞ものでもあり，従ってそこから生じる結論もまた，必然的なものなのである．但し，ここでの＜必要且つ必然的な＞ということの意味は，通常の論証の前提命題（原理）が真であり第一のものであることが＜必要且つ必然的＞という場合とは異なる．(この点に関して，Berti(p.72) が言うのは，論証の「必然性」というよりも，むしろ，状況の「必要性」のように思われる．) これに関して，アリストテレスは，相手に何か意味のあることを言うように求める必要があるということを言った後で，次のように述べている．「確かにその人（相手）は，何かを言う限り，何か意味のあることを言う筈である．そうでなければ，このような者に対してはどんな議論も，その人自身に対しても，他の人に対してもあり得ないであろうから」(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 22-24). そして，始めにアリストテレスは，次のようにも言っていたのである．「ἂν δὲ μηθέν, γελοῖον τὸ ζητεῖν λόγον πρὸς τὸν μηθενὸς ἔχοντα λόγον, ᾗ μὴ ἔχει· ὅμοιος γὰρ φυτῷ ὁ τοιοῦτος ᾗ τοιοῦτος ἤδη. しかし，もし（相手が）一言も言わないならば，このようなことのどんなことについても言論をもたない者に対しては，言論をもたない者である限り，言論で説明しようとすることは馬鹿げたことである．そのような者は，そういう者である限りは，既に植物のような者だからである」(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 13-15).

このことは，矛盾律を否定する者が彼に求められている前提に同意することが出来ないということを意味している．また，否定するためには，実際，何かを言うことが必要であり，言われた言葉に一定の意味を与えることをしなければならない．もし，相手が，そのような前提を認めることを拒否するのならば，彼は自分自身の立場を放棄することになろうし，従って，彼を論駁する必要はなくなるわけである．そこから，矛盾律の擁護の議論が出発する前提というものは，それなしには何ら論述があり得ないような前提であり，決してそれによってこの原理（矛盾律）そのものが否定されるようなものではなく，そして，この意味において，絶対＜必要且つ必然的な＞ものなのである．

論駁はこのような前提から出てくるものである．実際，アリストテレスも言っているように，「ἂν δέ τις τοῦτο διδῷ, ἔσται ἀπόδειξις· ἤδη γάρ τι ἔσται ὡρισμένον. ところで，もし相手が何かを言ってくれれば，論証があることになるだろう．というのは，すでに何か意味の定まったものが［前提として］与えられているわけであるから」(*Metaph.* Γ, c.4, 1006a 24-25) つまりそれは，対立する主張と相入れない何か或る事柄であり，従って，矛盾律そのものが肯定されることになるであろう．要するに，矛盾律を否定する者は，矛盾律を否定することが出来るために，矛盾律を肯定することを余儀なくされるのである．従って，矛盾律を否定することに成功していないことになる．こうして，矛盾律を否定することは論駁されるのである．このような論駁は，既に我々がみた意味での＜必然的な＞前提から出発するという限りにおいて，否定が偽であるということの論証であるから，従って，必然的に，その「否定すること」とは矛盾対立するもの，つまり，矛盾律を肯定することが真であるということを帰結として齎すのである．勿論，この論証によって，真なる知識へと至ることにもなる．

5．論点先取の否定

しかし，また，次のような反論の可能性も残っている．つまり，「もし，矛盾律が或る必然的な前提から出発して論証されるとすれば，矛盾律に先立って何か或るものが存在し，従って，

ちょうど個別学の学問的論証の場合にそうであるような，前提条件を認めることになるのではないか？」という反論である．これに対する解答は，アリストテレス自身によって与えられている．つまり，そこから議論が出発する前提が，矛盾律そのものとは異ならない場合，その当の論証は論点先取 (petitio principii) になる．しかし，そのような論点先取を犯しているのは，矛盾律を擁護しようとする者ではなくて，矛盾律を否定しようとしている者のほうである．実際，後者は，否定するために，何かを言わなければないないのであり，正に問題となっていることがらを認め，措定せざるを得ない．従って，もし，相手の立場が論点先取となっているならば，「ἀλλ' αἴτιος οὐχ ὁ ἀποδεικνὺς ἀλλ' ὁ ὑπομένων· ἀναιρῶν γὰρ λόγον ὑπομένει λόγον. この場合，責めは論証する人にではなくて，やむなく認める［相手］のほうにある．というのは，相手は，議論を廃棄しつつ，議論をやむなく認めている」(*Metaph.* Γ,c.4, 1006a 25-26) という限りにおいては，相手は，論駁されたと思われるからである．

要は，論証が或る前提から出発するのであるが，しかし，その前提が矛盾律そのものであり，ところが，その前提を前以て容認しているのが，矛盾律を擁護しようとする者の側ではなく，却って，矛盾律を否定しようとしている者の側であるということになる．しかも，そのことは否定をするという形において，認められているわけである．そこで，矛盾律の論証の出発点は，矛盾律そのものの否定であり，その論証は，そのような否定が，もし，これから否定しようと意図している事柄（つまり，矛盾律）を措定しないならば，巧く行かないということになるという逆説的な言い方をすることが出来るであろう．従って，矛盾律の真なることは，当の矛盾律の否定の否定ということによって結論付けられるということになる．

我々は，否定をするという働きをもつ問答法的な議論が，どのようにして成り立ち得るのか，そして，どのようにして必然性を以て帰結を得るのか，つまり，真正の知識と成り得るのかを見てきた．ここで，アリストテレスによれば，このような議論を行うことが単に哲学の任務であるばかりでなく，また，哲学の特殊な任務を示しているのでもある，ということを思い起こす必要があるだろう．この議論は，実際，矛盾律の真なることについての議論は，何に属するのかという問題，つまり，哲学，即ち，存在である限りの存在を扱う学に属するのか，或は，個別学に属するのか，ということを決定するという問題に関わるのである．(cf.*Metaph.* Γ, c.3,1005a 19-21.) アリストテレスの解決は，周知のように，この問題は哲学に属するというものである．それは，全ての学がこの矛盾律という原理を使用することが真であるとしても，その原理についての研究は，全ての存在に及ぶ限りにおいて，つまり，存在である限りの存在に及ぶ限りにおいては，存在である限りの存在の学そのものにしか属し得ないというのである (cf.*Metaph.* Γ, c.3,1005a 21 − b 2). 以上で，「吟味」「論駁」をその機能とするディアレクティケーが，ひとつのアポリアの方法としての哲学の方法として用いられうる状況を，Γ巻の矛盾律をめぐる議論に即して示しえたと思うが，しかし，アリストテレス自身は，当該の箇所において，この方法を「ディアレクティケー」とは呼んでいないのもテクストの告げる事実である．だが，Γ巻の末尾に近いところで，この哲学の方法がディアレクティケーであることをほのめかす派生語を用いている．最後に，それを引用して，小論をとじることとしよう．

> ἀλλὰ πρὸς πάντας τοὺς τοιούτους λόγους αἰτεῖσθαι δεῖ, καθάπερ ἐλέχθη καὶ ἐν τοῖς ἐπάνω λόγοις, οὐχὶ εἶναί τι ἢ μὴ εἶναι ἀλλὰ σημαίνειν τι, ὥστε ἐξ ὁρισμοῦ διαλεκτέον λαβόντας τί σημαίνει τὸ ψεῦδος ἢ τὸ ἀληχές.
>
> しかし，すべてこのような（「すべては真でありかつ真であらぬ」というような）議論に対しては，次のことを（相手に）要求するべきである．それはすでに先の議論において言われたように，何かがあるかあらぬかではなくて，何か意味のあることを指し示しているか，ということであり，従って，偽あるいは真とは何を指し示しているかという定義に基づいて問答するべきである（ディアレクテオン）．(*Metaph.* Γ, c.8,1012b 5-8)

文献

Berti, E., 1972. "La dialettica in Aristotele," L'attualità della problematica aristotelica – Atti del Convegno franco-italiano su Aristotele, Padova, 33-80.

Berti, E., 1989. *Le ragioni di Aristotele*, Bari.

Berti, E., 1996. "Does Aristotle's Conception of Dialectic Develop?", in Wians, W.(ed.), *Aristotle's Philosophical Development: Problems and Prospects*, Lanham, Maryland, 105-130.

Bolton, R. 1994, "The Problem of Dialectical Reasoning(Συλλογισμός) in Aristotle," in *Ancient Philosophy* 14, 99-144.

Brunschwig, J., 1964. "Dialectique et ontologie chez Aristote," in *Revue philosophique de la France et de l'Étranger, 89e année*, no 2, 179-200.

Cassin, B. et M.Narcy, 1989. *La Décision du Sens, Le Livre Gamma de la Métaphysique d'Aristote, introduction, texte, traduction et Commentaire,* Paris.

Cleary, J.J., 1995. *Aristotle & Mathematics: Aporetic Method in Cosmology & Metaphysics,* Leiden.

Croce, B., 1942. *Logica come Scienza del Concetto Puro, Filosofia dello Spirito, II,* Sesta Edizione Ri veduta, Bari.

Décarie, V., 1972. *L'objet de la Métaphysique selon Aristote*, Montréal-Paris.

Devereux, D., and P. Pellegrin(eds.), 1990. *Biologie, logique et métaphysique chez Aristote*, Paris.

Irwin, T., 1988. *Aristotle's First Principles*, Oxford.

Lugarini, L., 1972. *Aristotele e l'idea della filosofia,* Firenze.

Mesch, W., 1994. *Ontologie und Dialektik bei Aristoteles*, Gottingen.

Ortega y Gasset, J., 1962. *La Idea de Principio en Leibniz y la Evolución de la Teoria Deductiva,* en *Obras Completas,* Tomo VIII(1958-1959), Madrid.

Reale, G., 1993. *Aristotele Metafisica, Saggio introduttivo, testo greco con traduzione a fronte e commentario,* Edizione maggiore rinnovata, in 3 voll., Milano.

Ross,W.D., 1924. *Aristotle's Metaphysics. A revised text with introduction and commentary,* 2 voll. Oxford.

Smith, R., 1997. *Aristotle Topics Books I and VIII* , Clarendon Press, Oxford.

Wehrle, Walther E. 2000. *The Myth of Aristotle's Development and the Betrayal of Metaphysics*, Maryland(Rowman & Littlefield Publishers, Inc.).

Wians, W.(ed.), 1996. *Aristotle's Philosophical Development: Problems and Prospects*, Lanham, Maryland.

(あかい　きよあき,　広島大学［哲学］)

Errata

比較論理学プロジェクト研究センター報告 vol. 3(2005) 文献

p.15, 右 l.45-46, 誤) philoso-phy → 正) philosophy

p.16, 左 l.3, 誤) la l'Eranger, 89e → 正) l'Étranger, 89e

p.16, 左 l.9, 誤) mèaphysique → 正) métaphysique

p.16, 左 l.10, 誤) Oxford. de → 正) Oxford.

p.16, 左 l.11, 誤) Rijk → 正) de Rijk